

## 赤ちゃん返り

長田 瑞恵

### 娘の直感

私の第二子妊娠が明らかになったのは、娘が一歳九か月のころでした。新しい命を授かり、私も夫も大変喜びましたが、その反面、つい慎重にならざるを得ませんでした。というのも、娘のときには妊娠の最初期から切迫流産になってしまった経験があっ

たためです。そこで、落ち着くまでは周囲に妊娠の報告をせず、用心して過ごすことにしました。

当初は、娘にも私の妊娠のことは伝えませんでした。たとえ話をして聞かせたとしても、当時の娘にはまだきちんと理解できなかったと思います。ただ、そのころから、家庭での娘の様子が少しおかしいように感じていました。何となく機嫌が悪く、父

母にべったりとくっついて離れないことが増えたように思えました。しかし、多少の用心をしながら過ごしていたとはいえ、私の娘への接し方が激変したわけでもありませんでしたので、私の思い過ごしかもしれないとも思っていました。

そんなある日、娘を保育園に送っていった夫が、保育園の先生から声をかけられました。

「最近、お母さん、お忙しいのかしら」

どうも娘の様子がおかしいと感じていたのは、私の思い過ごしではなかったようでした。娘の変化は家庭だけでなく、保育園でも表れていたようでした。保育園でも娘はよく泣き、先生方にしがみついて離れないことが増えていたそうです。私は覚悟を決め、保育園の先生方に妊娠の報告をしました。先生方はすぐに合点がいったようでした。

それにしても、娘の鋭さには驚きました。第二子を妊娠した人の体験談として、誰よりも早く母親の

妊娠に気がついたのが上の子どもであったというような話をよく聞きますが、自分の娘もまた、そのような直感をもっていたのには驚きでした。言葉がたなく知識も少ない分、子どもには特別な感受性が備わっているようです。

そしてまた、娘の変化に敏感に気づいてくださった保育園の先生方にも脱帽し、娘を温かく見守ってくださいることに改めて感謝したのでした。

### 娘の赤ちゃん

保育園の先生方に妊娠の報告をしたころから、私は折に触れ、娘にも新しい命の存在を話して聞かせるようにしました。

「お母さんのおなかの中には、赤ちゃんがいるのよ。いいこいいこ、してあげてね」

保育園には娘より小さい赤ちゃんもいます。そのため、もともと娘は赤ちゃんが大好きで、保育園で

は赤ちゃんの簡単な世話をさせてもらっているようでした。

私の妊娠が進んでおなかが目立ち始めると、娘は「赤ちゃん」という存在にさらに強い興味をもつようになっていきました。そして、不思議なことに、娘は自分のおなかの中にも赤ちゃんがいると主張しだしたのです。

たとえば、娘が二歳一か月のころのことです。朝食中に娘が自分のおなかを指さして「赤ちゃん」と言うので、私が「S（娘の名前）のおなかにも赤ちゃんがいるの？」と尋ねると、娘はにっこりしながらうなずくのです。そして、朝食のおかずのウイナーを手に取り、自分のおなかに置くまねをしながら、再度、「赤ちゃん」と言いました。そこで私が「そう、赤ちゃんにも食べさせてあげるの」と言うとうと、娘はまたうなずきました。私が続けて、「じゃあ、たくさん食べなきゃね。たくさん食べて

赤ちゃんにも届くようにね」と言うとうと、娘は納得したようにウイナーを食べながら「赤ちゃん、おいしいってー」と満足気に朝食を済ませたのでした。

もっと傑作だったのは、父親のおなかの中にも赤ちゃんがいると娘が主張したことでした。「お母さんのおなかの中には赤ちゃんがいるのよ」と語りかけると、うなずきながら「Sも」と言います。

そこで試しに「じゃあ、お父さんには？」と尋ねてみると、しばらく考えた後で「うん」と言うのです。何度尋ねても、かなりまじめな顔をして「お父ちゃん、赤ちゃん、いる」と答えます。自分自身と母親とを重ね合わせ、さらにそこに父親も結びつけて考えることで、娘なりにまだ見ぬ「赤ちゃん」について考え、理解しようとしていたのだと思います。

### 揺れる気持ち

私の妊娠中、娘の赤ちゃん返りは強くなっては少

し収まり、また思い出したように表れるという具合に、まるで揺れる振り子のようでした。私は意識して、娘が甘えたいときにはできるだけ受け入れられるように心がけていました。しかし、切迫流早産を避けるために、娘を抱きかかえて歩き回ったり、娘と一緒に体を使って遊んだりということが難しくなっていました。娘は寂しい思いをしていたのかもしれませんが。

この時期の娘との関係の中で難しかったのは、娘の中に赤ちゃん返りと反抗期とが共存していることでした。娘は時には私にべったりと甘えてくる一方で、何でも「自分でやりたい」「人の言うとおりにほしたくない」という気持ちが強くなってきていました。そのため、甘えたい気持ちと反発したい気持ちが娘の中でもごちゃ混ぜになってしまうのです。娘自身も何がしたいのかわからなくなってしまう、最後には収拾がつかなくなるほど大泣きになっ

てしまうこともしばしばありました。そうかと思えば、反発したい気持ちに甘えたい気持ちがプラスされて、私が叱るようなことをわざと連発して、私の気をひこうとしているような様子も見えました。

### 新しい家族

娘は「母親のおなかの中に赤ちゃんがいる」ということは理解しているようでしたが、「おなかの中の赤ちゃんが、やがて家族としてわが家に加わる」ということは、あまりよく理解できていないようでした。そこで、臨月に入ったある日、私は改めて娘に語りかけました。

「もうすぐ、ちっちゃい赤ちゃんがSのおうちに来るのよ」

すると、娘はうれしそうに「ちっちゃい赤ちゃん、おうちに来るのねー」と繰り返し話すようになりました。「母親のおなかの中にいる赤ちゃん」と

「おうちに来る赤ちゃん」とが同じであるということとをきちんと理解できたかどうかはわかりませんが、それでも、新しい家族が加わることを娘が楽しみにしている様子が伝わってきました。

そして娘にこの話をした二日後、娘が二歳四か月のとき、予定日よりかなり早いにもかかわらず、充分に大きく育った男の子が生まれました。

息子が誕生した日の夜、娘は産院の新生児室のガラス越しに、大きな声で「日（息子の名前）くん！日くん！」と弟のことを呼んでいました。初めて見る赤くしわだらけの赤ちゃんや、喜びに包まれた父母の様子に、娘も「何か重大なことが起きた」ということを感じているようでした。

息子が退院した日から、娘は早速お姉ちゃんぶりを発揮しました。暇さえあれば眠っている弟のそばへ行き、その手をそっと握って寄り添っています。

息子の世話をする父母の様子は、目を皿にして見つ



めています。オムツを替えていれば新しいオムツを持ってきてくれたり、寝かしつけるときには布団を掛けてくれたりするなど、実にかいがいしく弟の世話をします。また、ままごとの中でも、息子の世話をする私のしぐさをおかしくなるほど完璧にまねて遊んでいます。

しかし、その一方で、息子の誕生後、娘の赤ちゃん返りはさらに強くなりました。妊娠中に私が充分に抱いてあげられなかったこともあるのでしう

が、私にしきりに甘えるようになりました。保育園から帰宅すると私の元へ走り寄ってきて、「抱っこー」としがみつきます。また、息子に授乳しているとそばに寄ってきて、「Sもおっぱい飲みたい……」と恥ずかしそうに言うこともあります。

きょうだいが生まれるということは、単に家族に新しい関係が加わるということだけでなく、既に存在していた娘と私との関係まで見直しと再構築を迫られます。それは、大人の私にとっても決して易しいことではありません。まして幼い娘にとっては、それこそ、天地がひっくり返るほどの一大事なのでしよう。娘は「赤ちゃん返り」という形で私との関係の再調整を図っているのです。

私はできる限り娘の甘えに応じ、娘の声に耳を傾けたいと思います。もちろん、息子の世話を優先させなければならぬことも多く、その場合には父親である夫にできるだけ娘とかわるよう協力しても

らいます。きょうだいが生まれ、時には我慢が必要になったとしても、娘もまた息子と同じように両親から大切にされているということを、娘に伝えたいと思うのです。娘の心の成長のためには、大切にされ受容された経験を重ねることが必要ですし、それは、いずれ他者に優しく接し他者を受け入れるためにも重要なことだと思っております。

今日も、息子に授乳する私の横で、娘は赤ちゃん人形のオムツを替え、そして控えめに「Sもおっぱい飲みたい……」とつぶやきました。娘の赤ちゃん返りがいつまで続くのか今はよくわかりませんが、いつか娘が自然に「赤ちゃん」から「お姉ちゃん」に成長するまで、ゆっくり娘と向かい合っていくしたいと思います。

(十文字学園女子大学 専門は認知発達)

※主な著書「知識獲得過程についての理解の発達」

風間書房 二〇〇三年